報告　二

南宋末における『論語集注』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈

青木　洋司

はじめに

中国近世における「孝」の問題を検討するならば、『孝経』解釈の重要性は言を俟たない。朱熹『孝経刊誤』に基づく董鼎『孝経大義』が作成され、朱子学の盛行とともに流行するに至った。その展開を含めて、中国近世の『孝経』解釈史は重要である。

しかし、中国近世の学術のうち、元明において「国教化」された朱子学の展開を視野に入れるならば、朱熹の主著『四書集注』の「孝」も同じく重要であろう。そこで問題となるのが、『論語』において、孝・仁ともに初出となる学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章（以下、当該章）の解釈である。

松川健二氏は、当該章について、朱熹が程頤の解釈を一字の増減もなく、外注として圏外に掲げて委ねたことを「この朱熹の本注自体がいかほどの新味をも持たぬ[一]」とする。本報告では、松川氏のいう「新味」の問題を検討することはしないが、金履祥は程頤の解釈に出身地の洛の方言が見えるとしており、この他にも注目すべき注釈も少なくない[二]。『四書集注』の解釈を仮に「朱子学的解釈」と規定するならば、経書の注釈に示された朱熹の「孝」解釈の展開を検討することも意味の無いことではないだろう。

周知のように、朱熹の没後、南宋から元を経て、明初に至る四書の解釈は、結果的に『四書大全』に収斂した。南宋末から元の『論語』解釈は、佐野公治氏の『四書学史の研究』（創文社、一九八八）を始め豊富な成果が存在するが[三]、朱熹後学の解釈や、当時、勢力を保持していた陸学との関係など課題も存在する。

そこで、本報告は『論語集注』学而篇の当該章の解釈について、第一に、朱熹後学の解釈を明らかにするために、趙順孫『四書纂疏』から輔廣と蔡模を、第二に、陸学の解釈と、その展開を黄震の事例から、それぞれ検討する。

南宋末における四書注釈書には現存状況の問題があるため、個々の注釈書を検討しても個別的に分析したに過ぎないとの指摘も存在するだろう。第一、第二の事例を検討することにより、南宋末の『論語集注』における「孝」解釈の一端は明らかになるだろう。

なお、趙順孫『四書纂疏』は『儒蔵・精華編』百十二冊（北京大学出版社、二〇一四）、陸九淵は理学叢書『陸九淵集』（中華書局、

二〇〇八）、黄震は『黄震全集』（張偉・何忠礼主編、浙江大学出版社、二〇一三）をそれぞれ底本とした。

古注との関係を含めた朱熹の当該章の解釈、『四書大全』については、原氏の「報告三」において詳しく論じられているため、本報告では割愛した。また、書名の「四書」などは適宜、省略した場合もある。

一、南宋から元の『四書集注』注釈書の傾向

まずは、『四書集注』以後から『四書大全』成立に至るまでの注釈書とその傾向を確認したい。顧炎武は次のようにいう。

自朱子作『大学・中庸章句』『或問』『論語・孟子集注』之後、黄氏有『論語通釈』。而采『語録』附於朱子『章句』之下、則始自真氏。名曰『集義』止『大学』一書。祝氏乃仿而足之、為『四書附録』。後有蔡氏『四書集疏』、趙氏『四書纂疏』、呉氏『四書集成』。昔之論者病其泛溢。於是陳氏作『四書発明』、胡氏作『四書通』。而定宇之門人倪氏合二書為一、頗有刪正。名曰『四書輯釈』。

（『日知録』巻一八、四書五経大全）

朱子の『大学・中庸章句』『或問』『論語・孟子集注』を作りしの後より、黄氏に『論語通釈』有り。而して『語録』を采りて、朱子の『章句』の下に附すは、則ち真氏より始まる。名を『集義』と曰ふも『大学』の一書に止まる。祝氏、乃ち仿ひて之に足し、『四書附録』を為る。後、蔡氏の『四書集疏』、趙氏の『四書纂疏』、呉氏の『四書集成』有り。昔の論ずる者、其の泛溢なるに病む。是に於いて陳氏は『四書発明』を作り、胡氏は『四書通』を作る。而して定宇の門人の倪氏は二書を合して一と為し、頗る刪正有り。名を『四書輯釈』と曰ふ。

朱熹の『四書集注』関連著作の後に、黄榦『論語注義問答通釈』[四]、『語録』を附した真徳秀『四書集編』[五]、それを模倣した祝洙『四書集注附録』が作成された。その後、蔡模『四書集疏』、趙順孫『四書纂疏』、呉真子『四書集成』が、さらに、陳櫟『四書発明』、胡炳文『四書通』、この二書に基づく倪士毅『四書輯釈』が作成され、『四書大全』の藍本となった。

顧炎武の挙げる諸書で現存するのは、『四書集編』『四書通』『四書輯釈』である[六]。『四書大全』の成立を考慮した場合、これらを主要な注釈書とみなすことができよう。ただし、金履祥『論語集注考証』『孟子集注考証』への言及がないことに見えるように、南宋から元において、この他にも『集注』の注釈書は多く作成されている。

ここで、現存する最も古い『集注』の注釈書である真徳秀『四書集編』を確認したい。佐野公治氏は、その特徴を「朱子四書説の融合集大成を図ったと考えられ」るとする[七]。当該章では、『論語集注』の全文に続けて、「集義曰」とし、朱熹の『語録』『論語精義』『論語或問』『晦庵先生朱文公文集』、最後に「黄氏曰、先師嘗言、二程子之解釈・経義、非諸儒所能及」とし、黄榦の記す、朱熹の二程の解釈を賞賛した発言を引用する。

当該章に関連し、必要とみなした朱熹の著作を引用するのみであり、それ以外の解釈は存在しない。『論語集編』における朱熹の著作の引用は現行本とは必ずしも一致しないが[八]、朱熹の解釈を「融合

集大成」した面も存在するだろう。

しかし、『論語集編』には問題が存在する。第一は著者である。顧炎武は「止『大学』一書」とするが誤りである。『四書集編』のうち、『大学』『中庸』は真徳秀の著作であるが、『論語』『孟子』は劉承の著作である。[九]つまり、真徳秀の著作とは言い難いのである。第二は南宋末の受容である。『四庫提要』も指摘するが、[一〇]『四書纂疏』では、真徳秀の著作のうち、『大学衍義』『西山読書記』『西山文集』のみ引用され、それ以外の引用は存在しない。また、真徳秀と関わりのあった黄震も『論語集編』『孟子集編』には言及しておらず、朱子後学の解釈の検討には適当とは言い難い。そのため、本報告では『四書纂疏』を用いた。

二、趙順孫『四書纂疏』における「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈

趙順孫（一二一五―一二七六）字は和仲、号は格庵、縉雲（現在の浙江省）の人。『四書纂疏』（以下、『纂疏』）の作者として知られるが、『宋史』には立伝されていない。その伝は黄溍「格菴先生趙公阡表」（『文献集』巻十下　以下、阡表）に詳しい。

阡表によると、父の趙雷は、朱熹の弟子、滕璘に学を受けた朱熹三伝の弟子である。趙順孫は、嘉定十五年（一二二二）に童子出身を、淳祐十年（一二五〇）に進士出身を賜った。官は参知政事に至り、南宋滅亡（一二七六）の年の四月に没した。『纂疏』の他の著作は、『格庵奏稿』のみ現存し、『近思録精義』『孝宗繫年録』『中興名臣言行録』などは散佚した。

『纂疏』のうち、『大学』『中庸』は、宝祐四年（一二五六）には完成しており、『論語』『孟子』は、その後の完成である。[一一]以降は「所著『四書纂疏』、天下咸所伝誦」[一二]とされるように広く読まれた。しかし、批判も存在する。汪炎昶は次のようにいう。

世有『纂疏』『集成』。雖皆為四書羽翼、然『語録』無新旧之分、衆説有泛切之混。『章句』『集注』、反為所汨没。読者蓋深病之。及『発明』出、而此弊始掃。

（『定宇集』巻十七、定宇先生行状）

世に『纂疏』『集成』有り。皆な四書の羽翼為りと雖も、然れども『語録』に新旧の分無く、衆説に泛切の混有り。『章句』『集注』、反て汨没する所と為る。読む者、蓋し深く之を病とす。『発明』の出づるに及び、而して此の弊、始めて掃はる。

『纂疏』や『四書集成』の引用する朱熹の『語録』には「新旧の分」がなく、引用されている衆説には「泛切の混」の問題があり、そのために、朱熹の注釈は埋没していると指摘する。これらの弊害は陳櫟『四書発明』の出現によって、一掃されたとする。

汪炎昶は、『纂疏』『四書集成』における衆説の引用の混在を問題とする。『纂疏』の引用は「四書纂疏引用総目」によれば、朱熹の著作以外は、黄榦、輔廣、陳淳、陳孔碩、蔡淵、蔡沈、葉味道、胡泳、陳埴、潘柄、黄士毅、真徳秀、蔡模の計十三家である。他の『集注』の注釈書に比して、朱熹の著作のみならず、朱熹後学も多く引用する。多くの引用は特徴の一つであり、『纂疏』は南宋末期の朱子後学の解釈を検討する上で重要な注釈書と言えよう。

趙順孫は『四書纂疏』の著述方針を次のようにいう。

子朱子『四書』注釈、其意精密、其語簡厳、渾然猶経也。順孫旧読数百過、茫若望洋。因遍取子朱子諸書及諸高第講解、有可発明注意者、悉彙于下、以便観省。間亦以鄙見一二附焉。因名曰纂疏。

（四書纂疏序）

子朱子の『四書』の注釈は、其の意は精密、其の語は簡厳、渾然として猶ほ経のごときなり。順孫、旧読むこと数百過なるも、茫として洋を望むが若し。因りて遍く子朱子の諸書及び諸高第の講解を取りて、注の意を発明すべき者有れば、悉く下に彙め、以て観省に便しとす。間ま亦た鄙見の一二を以て附す。因りて名を纂疏と曰ふ。

「子朱子」と尊崇を示し、『集注』を経書に準ずると賞賛する。『集注』を数百回読み、さらに尊崇を強めた。そして、朱熹や朱熹後学の解釈を広く取り、その意を明らかにするものがあれば引用し、「纂疏」を作成したとする。広く引用する意を確認できよう。

『纂疏』の引用する朱熹後学の「四書」注釈書には散佚したものも多い。そのため、趙順孫の誤引や改変の可能性を排除できない。「『纂疏』の引用によると」との条件付きにはなるが、朱熹後学の解釈を検討することも意義があろう。

既述のように『纂疏』は、朱熹の著作、諸説の引用が混在している。当該章では、『集注』『語録』『論語精義』『論語或問』『晦庵先生朱文公文集』、朱熹後学の解釈を引用し、趙順孫の解釈は存在しない。朱熹著作の引用も非常に広い。例えば、『集注』「若上文所謂孝弟、乃是為仁之本」に次のようにいう。

『文集』曰、孝弟乃推行仁道之本。仁字則流通該貫。不専主于孝弟之一事、但推行之本、自此始耳。

（『纂疏』論語巻第一）

『文集』に曰はく、孝弟は乃ち仁道を推行するの本なり。仁の字は則ち流通該貫す。専ら孝弟の一事を主とせず、但だ推行の本は、此れより始まるのみ。

『晦庵先生朱文公文集』（巻四十、答何叔京）に見える「孝弟は仁を推し進める根本」とする一節を引用する。朱熹の著作から『集注』解釈に関連するものを広く引用することが確認できよう。

『纂疏』は、当該章において孝と仁の関係に関連して、黄榦、輔廣、葉味道、陳埴、蔡模の解釈を引用する。本報告では、朱熹の教授を直接受けた輔廣、一世代後の蔡模の解釈を検討する。

（一）輔廣の解釈

輔廣、字は漢卿、号は潜庵。伝貽先生と称される。呂祖謙、朱熹に従学した。『詩童子問』の作者としても知られる。『纂疏』では、輔廣の著作から『論語答問』『孟子答問』を引用する。両書ともに散佚しており、朱子後学文献叢刊之一『輔廣集輯釈』（田智忠輯校、福建教育、二〇一七）では、ともに『纂疏』から輯佚を行っている。

輔廣は、『集注』に引く「程子曰、…。故為仁以孝弟為本、論性則以仁為孝弟之本」に次のようにいう。

輔氏曰、既曰、本猶根也。然則孝弟為仁之本、仁為孝弟之本、同乎、否乎。曰、本之為根則同。而其所以為根則異。行仁以孝弟為根、以其施於外者言也。論性以仁為孝弟之根、以其発於内者言也。行仁不以孝弟為根、則其施無序、而無以極夫仁民愛物

之效。論性而不以仁為孝弟之根、則其発無所。而無以充乎孝親弟長之実。

（『纂疏』論語巻第一）

輔氏曰はく、既に曰はく、本は猶ほ根のごときなり、と。然らば則ち孝弟の仁の本爲ると、仁の孝弟の本爲ると、同じきや、否や。曰はく、本の根為るや則ち同じ。而れども其の根為る所以は則ち異なる。仁を行ふは孝弟を以て根と為すは、其の外に施す者を以て言へばなり。性を論ずれば仁を以て孝弟の根と為すは、其の内に発する者を以て言へばなり。仁を行ふは孝弟を以て根と為さざれば、則ち其の施すこと序無く、而も以て夫の仁民愛物の效を極むること無し。性を論じて仁を以て孝弟の根と為さざれば、則ち其の発すること所無し。而も以て孝親弟長の実を充たすこと無し、と。

朱熹の「本猶根」を挙げ、孝弟が仁の根本であるという時の「本」と、仁が孝弟の根本であるという時の「本」は、同一なのか、異なるのか、とする問いを示す。この問題に、「本」が根本であるという点では同じであるが、「所以為根」（根本となるもの）とすれば異なるとする。さらに、仁の実践に孝弟を根本とするのは用（活用）から述べたものであり、本性の仁からすれば、孝弟の根本であると答えている。

輔廣は、『集注』に引く程頤の解釈に基づき、「仁を為ふ」という「為仁の仁」（実践の仁）と、その根源にある「論性の仁」（本性の仁）に分けて、孝弟との関係を論じる。つまり、当該章は孝弟から「為仁の仁」への展開が示されているとする。朱熹と同様に当該章を「孝弟なる者は、其れ仁を為ふの本か」と解釈し、この仁は、「為仁の仁」であり、それとは別に「論性の仁」に分かれるとするのである。この背景にあるのは、二つの仁を区別しない解釈への批判であろう。

この他に『集注』に引く程頤の解釈を取り入れる注釈が存在する。『孟子』告子下「小弁之怨、親親也。親親、仁也」への『集注』「親親之心、仁之発也」に次のようにいう。

輔氏曰、此正程子所謂性中只有箇仁義礼智而已。曷嘗有孝弟来。仁主於愛、愛莫大於愛親者是也。

（『纂疏』孟子巻第一二）

輔氏曰はく、此れ正に程子の所謂る性中只だ箇の仁義礼智有るのみ。曷ぞ嘗て孝弟有らん。仁は愛を主とし、愛は親を愛するよりも大なるは莫しは是れなり、と。

『集注』では、親に親しむ心を仁の発露とみなす。輔廣は程頤の当該章の解釈を引用し、この仁を性中の仁、つまり、「本性の仁」とする。程頤を根拠とし、当該章の仁（為仁の仁）と異なる仁とするのである。

また、当該章の解釈を『論語』『孟子』において関連させる注釈も存在する。『孟子』滕文公章句上「之則以為愛無差等。施由親始」への『集注』「故其愛由此立、而推以及人、自有差等」に次のようにいう。

輔氏曰、『書』云、立愛自親始。蓋人之愛皆始於事親。因事親以立其愛。即所謂孝弟為仁之本也。然後推以及民及物。自有等差・軽重。此仁義之道、所以相為用也。

（『纂疏』孟子巻第五）

輔氏曰はく、『書』に云ふ、愛を立つるは親より始む、と。蓋

し人の愛は皆な親に事ふるに始む。親に事ふるに因りて以て其の愛を立つ。即ち所謂る孝弟は仁を為ふの本なり。然る後、推して以て民に及び物に及ぶ。自ら等差・軽重有り。此れ仁義の道、相ひ用を為す所以なり。

「愛を立つるは親より始む」を引用する。[一三] 人の愛は親に仕えることから始まる。親に仕えて愛を立てる、これが『論語』の「孝弟は仁を為ふの本」である。これを推し進めて、民や外物に及ぶため、愛には区別や軽重が存在する。これを仁義の道の活用とする。

輔廣において注目すべきは、初めに引用した「孝弟為仁之本、仁為孝弟之本。同乎、否乎」との問いである。これは、当該章における孝と仁の関係が、朱熹後学において議論となっていたことを示すものであろう。そのため、『集注』に引く程頤の「為仁の仁」「論性の仁」を取り上げ、その関係を論じたのである。また当該章の注釈や経文は、他の解釈にも引用されており、輔廣にとり、大きな意味を有していたことも見える。

（二）蔡模の解釈

蔡模（一一八八―一二四六）字は仲覚、号は覚軒、建安（現在の福建省）の人。『書集伝』の著者、蔡沈の長子である。『纂疏』では、蔡模の著作から、『論語集疏』『孟子集疏』『大学演説』『講義』を引用する。

著作のうち現存する『孟子集疏』は『集注』を全文引用し、続けて、「集疏曰」と自己の解釈を附す。『或問』の引用は多いが、『語類』、その他の引用は少ない。

蔡模は、『集注』に引く「程子曰、…。故為仁以孝弟為本、論性則以仁為孝弟之本」に次のようにいう。

蔡氏曰、仁就性上説、孝弟就事上説。譬如桃仁・杏仁中具生理。凡其根幹・枝葉、自華而実、無非生理之貫通。此論性以仁為孝弟之本也。然生理貫通、又必自根幹而枝葉、其発動萌芽、必有其初、以至于華而実焉。此謂為仁以孝弟為本也。

（『纂疏』論語巻第一）

蔡氏曰はく、仁は性の上に就きて説き、孝弟は事の上に就きて説く、と。譬ふれば桃仁・杏仁の中に生理を具ふるが如し。凡そ其の根幹・枝葉、華よりして実、生理の貫通に非ざるは無し。此れ性を論ずれば仁を以て孝弟の本と為すなり。然れども生理の貫通は、又た必ず根幹よりして枝葉あり、其の萌芽を発動するは、必ず其の初め有り、以て華に至りて実あり。此れ仁を為ふは孝弟を以て本と為すを謂ふなり、と。

朱熹の「仁就性上説、孝弟就事上説」[一四] を引用し、仁と孝弟との関係は、桃や杏の種子に生意があるようなものとする。根や幹、枝や葉、花や実は、全て生意が貫いている。そのため、程頤のいうように、本性から論ずれば仁は孝弟の根本である。しかし、根や幹、枝や葉には、必ず萌芽があり、その後、花から実となる。従って、花が咲き、実ができるのは種子を根本とするように、仁の実践は孝弟を根本とする。

蔡模は、朱熹の発言を示し、桃や杏の種子の比喩、程頤の解釈を引き、仁と孝弟の関係を解釈する。輔廣と同様に、「為仁の仁」「論性の仁」に分けて、その関係を論じており、朱熹の解釈を遵守することは明白である。

これに関連し、『孟子』離婁章句上「孟子曰、仁之実、事親是也。義之実、従兄是也」への『集注』「有子以孝弟為為仁之本。其意亦猶此也」に次のようにいう。

蔡氏曰、有子以孝弟為為仁之本。孟子乃以事親属之仁、従兄属之義、若不同矣。而朱子乃以為其意亦猶此也。何邪。蓋有子言仁、即所謂専言之仁也、孟子所言仁義、即所謂偏言之仁也。事親主乎愛而已。義則愛之宜者也。合而言之、則推其事親者以従其兄、此孝弟所以為為仁之本也。分而言之、則事親而孝、従兄而弟、所以為仁義之実也。[二五]

（『纂疏』孟子巻第七）

蔡氏曰はく、有子は孝弟を以て仁を為ふの本と為す。孟子は乃ち親に事ふるを以て之を仁に属し、兄に従ふもて之を義に属するは、同じからざるが若し。而れども朱子は乃ち以為へらく、其の意も亦た猶ほ此くのごときなり、と。何ぞや。蓋し有子の仁を言ふは、即ち所謂る専言の仁なり。孟子の言ふ所の仁義は、即ち所謂る偏言の仁なり。親に事ふるは愛を主とするのみ。義は則ち愛の宜なる者なり。合して之を言へば、則ち其の親に事ふる者を推し、以て其の兄に従ふは、此れ孝弟は仁を為ふの本と為す所以なり。分ちて之を言へば、則ち親に事へて孝、兄に従ひて弟は、仁義の実を為す所以なり、と。

有子は孝弟を仁の実践する根本とし、孟子は親に仕えることを仁、兄に従うことを義とする。両者は異なるように見える。しかし、朱熹が「其意亦猶此也」とすることを問題とする。蔡模は、有子のいう仁を「専言」（広義）の仁、孟子のいう仁義を「偏言」（狭義）の仁とする。[二六] 親に仕えることを推し進め、兄に従うことは、孝弟が仁を実践する根本であることを示すとする。つまり、「専言」「偏言」を用いて、朱熹の『論語』『孟子』の解釈を矛盾のないようするのである。

当該章は、輔廣、蔡模ともに、『集注』に基づき、仁を「為仁の仁」と「論性の仁」に分け、孝弟から「為仁の仁」への展開を示したとする。次に朱熹と異なる解釈への対応を陸九淵と黄震の事例から確認したい。

三、陸九淵と黄震の「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈

（一）陸九淵の解釈

陸九淵（一一三九―一一九二）、字は子静、金渓（現在の江西省）の人。象山先生と称される。朱熹の論敵の一人として知られる。陸九淵の学術は、その没後も浙江を中心に力を保持していた。[二七]

高弟の楊簡による行状に収録された有名な発言であるが、[二八] 十三歳には、当該章との関係を示す、次の出来事があったとされる。

嘗言年十三時、復斎因看『論語』、命某近前問云、看有子一章如何。某云、此有子之言、非夫子之言。先兄云、孔門除却曾子、便到有子。未可輪議。更思之如何。某曰、夫子之言簡易、有子之言支離。

（『陸九淵集』巻三四、語録下）

嘗て言ふ、年十三の時、復斎、『論語』を看るに因りて、某に命じて近前せしめ問ひて云ふ、有子の一章を看ること如何、と。某云ふ、此れ有子の言にして、夫子の言に非ず、と。先兄云ふ、孔門、曾子を除却すれば、便ち有子に到る。未だ軽議すべからず。更に之を思ふこと如何。と。某曰はく、夫子の言は簡易にして、有子の言は支離なり、と。

兄の復斎（陸九齢）から、当該章について質問された際に、有子の発言であり、孔子の発言ではない、と答えた。さらに、有子を軽視すべきではないと言われ、有子の発言を「支離」と答えた。

ここでは簡潔に「支離」とするが、何を以て「支離」とするかは、管見の及ぶ限り、陸九淵の文集や語録には見えない。しかし、『朱子語類』には次の発言が見える。

陸伯振云、象山以有子之説為未然。仁乃孝弟之本也。有子説君子務本、本立而道生。起頭説得重、却得。孝弟也者、其為仁之本与、却説得軽了。先生曰、上両句汎説、下両句却説行仁当自孝弟始。

（『朱子語類』巻二十、有子曰其為人也孝弟章）

陸伯振云ふ、象山は有子の説を以て未だ然らずと為す。仁は乃ち孝弟の本なり。有子説く、君子は本を務む、本立ちて道生ず、と。起頭に説き得ること重く、却て得。孝弟なる者は、其れ仁の本為るかは、却て説き得ること軽く了る、と。先生曰はく、上の両句は汎く説き、下の両句は却て仁を行ふは当に孝弟より始むべしと説く、と。

陸伯振は、朱熹への当該章の質問において、陸九淵に言及する。これによると、陸九淵は、もともと仁こそが孝弟の根本だとみなしていた。そして、当該章を取り上げ、「君子は本を務む、本立ちて道生ず」は重々しいが、かえって良い。しかし、「孝弟なる者は、其れ仁の本為るか」は、かえって軽い、と発言したようである。

陸九淵は「仁乃孝弟之本也」としており、自己の解釈に、そぐわない有子の発言を批判したのであろう。さらに、ここに見えるように陸九淵は当該章を「仁の本為るか」と解釈していたため、朱熹は陸伯振に「仁を為ふの本か」とすることを説明しているのであろう。[一九]

陸九淵の有子への批判は、この他にも『朱子語類』に見えるが、その解釈の異同は、当然ながら当該章のみではない。龔霆松『四書朱陸会同注釈』が作成されるなど、元においても議論となっていたことも見える。朱熹後学は、朱熹と異なる解釈に、どのように対応したのであろうか。黄震の事例から確認したい。

（二）黄震の解釈

黄震（一二一三―一二八一）字は東発、於越先生と称される。慈溪（現在の浙江省）の人。黄震の「四書」解釈は拙稿で既に論じた。[二〇]『論語』『孟子』に限定して確認すると、「晦庵『集注』、已各発其旨趣之帰、辞意瞭然、熟誦足矣」（『黄氏日抄』巻三、以下、『日抄』）とするように、朱熹の解釈を尊崇する態度である。

『日抄』の『論語』『孟子』関連箇所では、『集注』『或問』『語録』の引用は見える。しかし、『纂疏』とは異なり、朱熹後学の引用は少ない。その少ない例外の一つが、当該章の解釈における陸九淵への言及である。

黄震は「読本朝諸儒書」（『日抄』巻四二）において、陸九淵の

文集や語録への批判を行う。黄震は次のようにいう。

編『論語』者亦有病。愚按、此語未易軽発。惟象山自児童時、已悪見『論語』第二章。此不可暁。

（『日抄』巻四二、陸象山語録）

『論語』を編む者、亦た病有り、と。愚按ずるに、此の語、未だ軽発するに易からず。惟だ象山のみ児童の時より、已に『論語』の第二章を悪見す。此れ暁るべからず。

陸九淵の「『論語』を編纂した者には欠陥がある」なる発言を取り上げ、軽率に発言すべきことではないとし、さらに、陸九淵十三歳の時の当該章への批判に言及し、理解できないとする。

『日抄』では、陸九淵の当該章への批判は繰り返し言及される。黄震は次のようにいう。

象山読書・修己、本未嘗不与人同。而其『語録』謂『論語』多有無頭柄説話、謂編『論語』者、亦有病。謂『論語』第一章学而時習、不知時習者何事。謂第二章言孝弟為支離。

（『日抄』巻四二、陸象山語録）

象山の読書・修己、本より未だ嘗て人と同じからずんばあらず。而れども其の『語録』に謂ふ、『論語』多く頭柄無きの説話有り、と。『論語』を編む者、亦た病有りと謂ふ。『論語』の第一章の学びて時に習ふは、時に習ふは何事かを知らずと謂ふ。第二章に孝弟を言ふは支離為りと謂ふ。

陸九淵の読書や修身は他者と異なることはないとする。その上で、語録から『論語』に関連する四点の発言を取り上げ、批判的に言及する。第一は、『論語』には大切な箇所が抜けている話が多い。第二は、先ほどと同様に『論語』の編者には欠陥がある。第三は、第一章の「学而時習」は、いつのことか不明である。そして、第四は、第二章に孝弟を言うことを「支離」とすることである。

ここでは一連の引用において、その末尾に「支離」とすることを挙げる。『日抄』では、この他にも、陸九淵の素質を評価するが、やはり、有子の発言を「支離」としたことを批判する。

このように当該章に関する陸九淵の発言に繰り返し言及しているのは、地域的な問題を含め、その必要があるためであろう。これは当該章の解釈と、どのように関連するのであろうか。黄震は次のようにいう。

按『論語』首章言学、次章即言孝弟。聖門之教人、莫切於孝弟矣。此章象山斥其為支離、固不可知。程子言、為仁以孝弟為本、論性則以仁為孝弟之本。性中只有仁義礼智。曷嘗有孝弟来。其説性尤精。而性中曷嘗有孝弟之語、後覚乍見、亦或以為疑。…。因嘗思、理一而已。聖賢発明、則愈久愈備。大舜時止説克諧以孝、未曽説仁。湯時方説仁、乃与寛対説。孔子説仁、又多与智対説。至孟子方説仁義礼智四者、而理益大備。程子謂曷嘗有孝弟。蓋以孟子之説釈有子之説爾。

（『日抄』巻二、有子孝弟章）

按ずるに、『論語』の首章は学を言ひ、次章は即ち孝弟を言ふ。聖門の人を教ふるは、孝弟よりも切なるは莫し。此の章、象山、斥ぞけて其れ支離と為すは、固より知るべからず。程子言ふ、仁を為ふは孝弟を以て本と為し、性を論ずれば則ち仁を以て孝弟の本と為す。性中に只だ仁義礼智有り。曷ぞ嘗て孝弟有らん、と。其の性を説くこと尤も精なり。而れども性中曷ぞ嘗て孝弟有らんの語、後覚、乍ち見、亦た或いは以て疑と為す。…。因

りて嘗て思ふ、理は一のみ。聖賢発明し、則ち愈いよ久しく愈いよ備はる。大舜の時、止だ克く諧ぐるに孝を以てすと説くも、未だ曽て仁を説かず。湯の時、方に仁を説くも、乃ち寛と対して説く。孔子、仁を説くこと、又た多く智と対して説く。孟子に至りて方に仁義礼智の四者を説き、而も理益ます大いに備はる。程子謂ふ、曷ぞ嘗て孝弟有らん、と。蓋し孟子の説を以て有子の説を釈くのみ。

『論語』は、第一章では「学」を、第二章では「孝弟」を述べており、孔子の門下では、人を教えることに孝弟を重視している。それにも関わらず、陸九淵は第二章を「支離」とした。これを批判し、『集注』に引く程頤の「為仁の仁」「本性の仁」に分けて、孝弟との関係を論じる解釈を引用し、本性を説くことを精密と評価する。続けて、程頤の「性中曷嘗有孝弟」に疑問を持つ者がいるとし、舜の時は『尚書』堯典にあるように、単に「孝」を説くのみであったが、孟子に至り、仁義礼智の四者を説くに至ったことを挙げ、孟子のいう仁義礼智の説を用いて、有子の発言を解釈したとする。

黄震は、本条において、これまでと同様に陸九淵の「支離」とする発言に言及する。この繰り返しの言及は、許容し難く、批判すべきとしたためであろう。また程頤の解釈に疑問を持つ者がいたことを記す。これに対して、異なる解釈、あるいは、その解釈の修正を試みるではなく、舜から孟子に至るまでの事例を記し、程頤の解釈に問題点が無いことを示している。言うなれば、程頤を弁護する態度を取っている。これも黄震の解釈の特徴であろう。

まとめにかえて

本報告は、南宋末における『論語集注』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章の解釈について、第一に、輔廣と蔡模を、第二に陸九淵とそれに対する黄震の事例を中心として検討した。

初めに『四書集注』以後から『四書大全』成立に至るまでの注釈書とその傾向を確認した。現存する最も古い「四書」注釈書の『四書集編』は、著者、受容ともに問題があるため、朱熹後学の解釈の検討には適当とは言い難い。そのため、『四書集注』を経書に準え、朱熹の著作や朱熹後学の解釈を多く引用する趙順孫の『四書纂疏』を用いて、検討した。以下、その検討を振り返りたい。

第一は、輔廣と蔡模である。輔廣は、『集注』に引く程頤の解釈に基づき、「仁を為ふ」という「為仁の仁」と、その根源にある「論性の仁」に分けて、仁と孝弟との関係を論じた。そして、当該章には「為仁の仁」への展開が示されているとする。

蔡模は、仁と孝弟との関係を桃や杏の種子の比喩によって論じた。その根拠は、『集注』に引く程頤の解釈である。また、有子のいう仁と孟子のいう仁の異同に対する朱熹の注釈には、有子の仁を「専言」、孟子の仁を「偏言」とすることにより、両者の発言を矛盾のないように解釈した。

輔廣、蔡模ともに、当該章の仁を「為仁の仁」とし、「孝弟なる者は、其れ仁を為ふの本か」と解釈するのは同様である。当該章には、孝弟から「為仁の仁」への展開が示されているとし、他の解釈に引用している。この解釈は、朱熹後学によって、大きな意味を有

していたことが確認できよう。

第二は、陸九淵と黄震である。陸九淵は、仁こそが孝弟の根本だとみなす。その上で、自己の解釈にそぐわない当該章の有子の発言を批判した。これは若年からであった。また、朱熹と異なり、「仁の本為るか」と解釈する。

黄震は、陸九淵が有子の発言を「支離」としたことに繰り返し言及する。これは、その必要があるためであろうが、当該章の解釈とも関連する。黄震は、陸九淵の発言に言及し、さらに、程頤の仁を二つに分ける解釈を取り上げ、疑問を持つ者がいたことを記す。しかし、異なる解釈や修正を試みるのではなく、舜から孟子に至るまでの事例を記すことで、程頤の解釈に問題点が無いことを示す。

南宋末における当該章の解釈において重視されたのは、仁を「為仁の仁」「論性の仁」に分ける『集注』に引く程頤の解釈である。朱熹に教授を直接受けた輔廣、一世代後の蔡模、あるいは異なる解釈に対応した黄震も、この点は同様である。つまり、当該章の孝・仁の関係の解釈は程頤を遵守し、仁を二つに分け、孝弟から「為仁の仁」へと展開の示すとするのである。これこそが南宋末における朱熹後学の当該章の解釈の特徴である。

本報告は、学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章のみの限定的な事例である。朱子学における「孝」に取り組むのであれば、当然ながら、「四書」全体や『孝経』を含めて他の経書における「孝」解釈も視野に入れる必要があるだろう。全て今後の課題としたい。

《注》

(一)『宋明の論語』所収「孝悌と仁」、(汲古書院、二〇〇〇)

(二)『論語集注考証』学而「性中至孝弟来」条「此洛中方言。来字猶許・蔡間裏字。謂性中只有仁義礼智。何嘗有孝弟事行在裏。猶言倉中只有穀粟。何嘗有秧禾在裏。仁発出方為孝弟、穀粟発出方為秧禾」

(三) 元における『論語』解釈は廖雲仙氏『元代論語学考述』(新文豊出版社、二〇〇五)、周春健氏『元代四書学研究』(上海華東師範大学出版社、二〇〇八)などが存在する。

(四) 同書は現存せず、詳細は不明である。魏了翁は「勉斎黄直卿合朱文公三書、為『論語通釈』」(『鶴山集』巻五五、論語通釈序)とする。魏了翁のいう「朱文公三書」が具体的に何を指すのかは不明である。仮に『集注』『或問』『語録』の三書とするならば、『語録』を附したものとしては『四書集編』よりも早い注釈書となる。待考。

(五) 附された『語録』であるが、言うまでもなく、黎靖徳編『朱子語類』百四十巻は成立前である。

(六) 蔡模『四書集疏』は、後述するように『孟子集疏』のみ現存する。

(七) 佐野氏前掲書。第四章、「二 真徳秀『論語集編』」参照。

(八) 吉原文昭氏「真徳秀の論語集編」(芸林、一九(一)、一九六八)に、この問題の指摘がある。

(九) 子の真志道の序文に「如『論語・孟子集注』、雖已点校、而『集編』則未成」(『四書集編』学庸集編原序)とある。また、劉才之の序文には、劉承が『西山読書記』『大学衍義』などから作成したとある。この問題は、王義山が「近世真西山作『中庸・大学衍義』、而不及『論』『孟』。非若衡斎所衍為全書也」(『稼村類藁』巻六、周衡斎四書衍義序)とするように、元においても論じられている。

(一〇)『四庫提要』四書集編の項に「趙順孫『四書纂疏』備列徳秀所著諸書、

而不載其目。蓋至宋末始刊、其出最晩、順孫未之見也」とある。

（一一）この問題は、鶴成久章氏「『四書纂疏』所引の朱子学文献について―『朱子語録』を中心に―」（『中国中世文学研究』第六三・六四合併号）森野繁夫博士追悼特集、二〇一四）も指摘している。

（一二）鄭真『滎陽外史集』巻三七、読趙格菴墓表「故宋格庵先生趙公、上承朱子之伝、所著『四書纂疏』、天下咸所伝誦」

（一三）『尚書』とするが誤引である。実際には『礼記』祭義「子曰、立愛自親始、教民睦也。立教自長始、教民順也。教以慈睦、而民貴有親」に基づく。

（一四）既述のように、黎靖徳編『朱子語類』は成立前だが、『朱子語類』巻二〇に「『孝弟為仁之本』注中、程子所説三段、須要看得分曉。仁就性上説、孝弟就事上説」とある。

（一五）『孟子集疏』巻七にも同文を収めるが、文字の異同などは存在しない。

（一六）朱子学における「専言」「偏言」は、湯城吉信氏「「専言」「偏言」から「泛言」「専言」へ―中井履軒による朱子学用語の換骨奪胎」（『中国学の十字路―加地伸行博士古稀記念論集』所収、研文出版、二〇〇六）参照。

（一七）『北溪大全集』巻二十三、与李公晦一「頗聞、浙間年来、象山之学甚旺。以楊慈湖・袁祭酒、為陸門上足。顯立要津、鼓簧其説、而士夫頗為之風動」

（一八）『慈湖遺書』巻五、象山先生行状「某曰丱角時、聞人誦伊川語、自覚若傷我者、亦嘗謂人曰、伊川之言、奚為与孔子、孟子之言不類。初読『論語』即疑有子之言支離」

（一九）『朱子語類』巻二十「因説陸先生毎対人説有子非後学急務。又云以其説不合有節目、多不直截。某因謂、是比聖人言語較緊、且如孝弟之人、豈尚解犯上、又更作乱。曰、人之品不同。亦自有孝弟之人解犯上者、自古亦有作乱者。聖賢言語寛平、不須如此急迫看」

（二〇）拙稿「黄震の『四書集注』解釈―『黄氏日抄』を中心として―」（『国学院中国学会報』第六十二輯、二〇一六）

（二一）『黄氏日抄』巻三、有若似聖人一章「陸象山天資高明、指心頓悟、不欲人従事学問。故嘗斥有子孝弟之説為支離。奈何習其説者不察、因翔攻之於千載之下耶。…。而講象山之学者、又往往襲取以証精神之説。恐本旨亦不如此。在学者詳之」

（二二）『孟子』告子上「仁義礼智、非由外鑠我也、我固有之也」など。